

学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2024年12月11日
第50号

バレー部新チーム好調な滑り出し 後志地区新人戦で優勝

バレー部は1・2年生の新チームで12月7日、8日に余市で行われた後志地区新人戦に臨み、俱知安、桜陽、未来創造・岩内の合同チーム、潮陵と対戦し、いずれも2-0で勝ち、優勝した。主将の丸山璃恋さん（2・4、写真前列中央）にインタビューした。また、波木ひなこさん（2・4、前列右から2人目）は愛知県で開催されるバレーボール全国選抜強化合宿（ビーチ）に参加し、日本代表二次選考会（U19・21）に臨む。北海道からは2名参加する。



主将の丸山さんは新チームのデビュー戦を「トレーニングの成果を出せたし、雰囲気も良かった」と振り返った。ただ「相手に流れを持っていかれたときに一本で切れないので、これまでのトレーニングを継続し、体力をつけ、ジャンプ力を上げ、日頃の練習から全力で臨みたい」と語った。

波木さんはバレーの身体能力テストで1位を取ったことがある。「ビーチバレーは砂の上で動きづらい競技だが、中村先生の指導の下、体の軸を鍛えてきた。ストレッチなど十分準備して合宿で頑張りたい」と語った。

真珠湾攻撃 なぜ、どのように



真珠湾の戦艦アリゾナ号

真珠湾攻撃の経緯

十二月八日、その日は大本国海軍が約三百五十機の攻撃機で米海軍拠点ハワイ州オアフ島に攻撃を敢行し、日米戦争の火蓋を切った真珠湾攻撃の日です。今号では、どのように日本海軍が真珠湾攻撃に至ったのかをご紹介します。

まず、攻撃までの流れを概観します。1937年（昭和12年）の盧溝橋事件を契機に中国との全面戦闘に発展し、日本軍は中国各地を占領していきます。さらに欧州を席巻しているドイツとの同盟、仏印進駐などを行い、米英の反感を買いこととなり、米国は対日経済制裁を加え、鉄・石油などの輸出を禁止しました。それにより日本は日米開戦に踏み切ったのです。

常識破りの作戦

それでは、真珠湾攻撃とはどういったものだったのでしょうか。実はこの作戦は当時の海軍常識をまったく無視した作戦で、そのため数々の問題がありました。そもそも日本海軍上層部、いえ兵士でさえ航空機によるハワイ空襲など考えていませんでした。ただ一人を除いて。その一人とは今日でも名将と謳われる山本五十六元帥です。

〈人物紹介〉
山本五十六元帥海軍大将 聯合艦隊司令長官
源田實海軍大佐 第一航空艦隊航空甲参謀
淵田美津雄海軍大佐 第一航空艦隊飛行長
山口多聞海軍中将 第二航空戦隊司令官
大西瀧治郎海軍中将 第十一航空艦隊参謀長

以上の方が本件を語る上で重要な方々です。どのような経歴、人物であったかは割愛致します。

山本元帥は米国ハーバード大学に留学経験があり、米国との国力差を痛感していました。そのため日米開戦に一貫して反対しました。しかし戦争は避けられないものになり、元帥自身が殆ど勝ち目がないと思っている戦争を聯合艦隊の長として指揮することになりました。



双葉歴史探偵事務所

□1□

元帥が思っていたのは真珠湾攻撃でした。しかしこれは、当時の海軍常識を逸脱していました。なぜなら、

未だかつて航空機による大規模な軍港攻撃など行われていなかったのです。そのため海軍司令部から投機的であると大反対を受けることとなります。問題はそれだけではありません。どのようにして、米国や第三国に発見されずにハワイまで行くのか。真珠湾に停泊する米艦隊に既存の航空兵器が通用するのかといった問題がありました。

海軍航空隊のチームワーク

それらの問題を解決したのが先に名前を上げた方々です。山本元帥は初めに海軍航空隊の権威大西瀧治郎中将にこの作戦を打ち付けました。大西中将は元パイロットの源田大佐に作戦の具体化を依頼しました。源田大佐は航路の問題について、船が少ない北方のアリユーシャンから南下することを立案しました。そこで北海道沖の択捉島から密かに艦隊を出発させたのです。

兵器の問題は源田大佐と同期の淵田大佐が航空技術陣に発破をかけ、最新兵器を開発させ、山本元帥の子飼いの部下である山口多聞中将が猛特訓によりパイロットの技量向上に努め、当時世界最強とも言える海軍航空隊を作り上げました。

こうして真珠湾作戦が実行されるのですが、具体的なことについてはまた、後日と致しましょう。当探偵事務所の閉所の時間となりました。

米国人の視点から

＊・＊・＊

マッケンティー先生によると「ルーズベルト大統領は真珠湾攻撃を「卑怯な騙し討ち」として「この日の屈辱を忘れない」と語り、宣戦布告したことが知られている」という。攻撃の死傷者は2402人に上った。ハワイの日系人社会にとっても大きな打撃となった。

